

土木と市民・地域との新たな接点を模索する

(2) オンサイトツーリズムの提案

*平野 勇



1. はじめに

国家・社会に対する価値観が流動化する現代日本では、土木はかつてない難題に直面している。第1編では、人間と社会における土木の意味、歴史的意義、技術的特徴など“土木とは何か”を見つめ、この難題の打開策として「土木と市民・地域との接点強化」の重要性について指摘した。土木インフラの持つ基幹機能に教育文化、情報発信、集人・集客、経済機能等の価値を付加して、科学技術リテラシー醸成、ツーリズム、地域活性化など市民や地域の多様なニーズに応じて土木を多面的・重層的に展開しようというものである。

本編では、この難題を土木のような“フィールド型、実務・実体型分野”の共通課題として広く捉え、その具体的方策として“オンサイトツーリズム/オンサイトパーク”を提案する。さらに土木と密接に関わり、理念や領域の多くを共有するエコツーリズム、グリーンツーリズム、産業ツーリズムを紹介する。これらは、その土木バージョンである“シビルテクノツーリズム/シビルテクノパーク”を提案する布石であり、地域づくりやツーリズムが国交省の基幹施策であることを強く意識したものであることはいままでもない。

2. 情報化社会の功罪

2.1 私たちが取得する情報には

私たちが取得する情報には自らの五感によって取得した“On Site Information : OSI”と他の人々によって取得・加工・伝達された“Processed Media Information : PMI”がある。

OSIは、ありのままの自然、人々とその生活や様々な活動、文化、創造物、社会・産業システムなど直にふれ、また、自ら生き活動する中で、五感でもって実体から取得する生(ナマ)情報を指している。OSIは、五感や言語化され形式化された情報だけでなく、驚き、喜び、楽しみ、やす

らぎ、心地よさ、疲れなど情緒的な情報も含む。

PMIは、マスメディア、書籍・出版物、博物館、ネット等、他の人々によって、明確な意図をもって取得・加工・伝達された情報を指している。

2.2 “Processed Media Information”の功とは

個々人は社会の極々一部を自らの領分として分担し、それで得た対価をもって、新聞やテレビ、書籍・出版物、ネットをはじめとする様々なPMIを得ながら日々生活している。現代社会ではOSIのみで生活することは難しい。時間・空間を超えて取得できるPMIと情報化社会があつてこそ、人類の知識の蓄積と今日の科学技術の発展がある。

2.3 “Processed Media Information”の罪とは

情報化社会の荷体をなすPMIは物理的、論理的、倫理的に何ら縛られない“人間の無限の精神空間”を経て生まれるが故にあらゆる可能性を包含する。自分に伝わる過程で生産者・伝達者の積極的な価値判断による取捨選択、類型化、誇張、脚色は不可避である。こうして真・偽、清・濁、益・害、協・反など様々なPMIが発信され、この国の情報化社会が形成されている。これは民主主義国家の至上の価値であり、社会の柔軟性、強靱性、健全性でもあり、病理性でもある。

現代社会では、自分の存在や生活に関わる情報の多くの部分をPMIに頼らざるを得ない。しかも、PMIの真実・実体からの乖離や変形はおろか、生産者・伝達者によるプロセッシングの存在さえも忘れがちである。私たちは無防備の状態ですらPMIさらされ、PMIの背景や前提条件も認識せず、感じ方、捉え方が受け身となり、思考や行動も均一化してしまう。ネット社会の出現は、現実と仮想が無境界となり、仮想社会、仮想人生に自らの価値を見いだす集団さえ出現するおそれがある。

現代日本はかつてない繁栄を誇りながらも、“個人と社会”の関わりが希薄化・流動化し、特にネット情報の氾濫は子供たちや若者が、自分の存在の意味、現実の重みはおろか、他の人々が、自分と全く同じ存在であることすら気づき、気づかせることを難しくしている。ネット情報の意図、

真偽、善悪も認識しない、構わない“Internet Information Dependent”を生みだし、依存者が依存者を再生産する“Internet Information Dependent Spiral”に突入しているのではないか。

3. “On Site Information”の大切さ

3.1 教育としての大切さ

現代社会は職業選択肢の多様化と職・住分離を生じて家庭でのOSI取得の幅を著しく狭めている。核家族化、個人・家庭と地域社会との関わりの希薄化はOSIの取得範囲を一層狭くしている。

自然や社会の現象、システム等を対象とする理科、社会の分野は観察や調べ学習、社会科・理科見学、実験・実習等を通じた好奇心や想像力の発揚、分析力、物づくり力、実践力の醸成が目標となる。それにはOSIを通じた教育が効果的である。しかし入試対策など効率性が求められる教育現場では、非効率なOSIによる教育は軽視されてきた。

PMI氾濫時代にあって、OSIによって自然、人間、社会の実像と本質を理解し、あるべき姿を学び、PMIの峻別力を身につけるPMIリテラシーが必要となる。そして良質なPMI発信力と日本の活力と発展の源泉である技術力、物づくり力を子供たちや学生に養わせなければならない。

3.2 個人としての大切さ

「百聞は一見にしかず」のように、自らが実体にふれて得るだろう情報を、他人が代わって取得し、伝えることは難しい。「PMIはOSIにしかず」である。OSIは、五感によって多覚的に認知し、思考することによって長期記憶としてストックされて自分のものとなる。また、OSIは、日々の仕事に追われ、失いかけた感性や人間性の回復を図ることができる。たまにどこかを訪ね、ありのままの自然、人々やその暮らし、文化にふれ、体験して、OSIに満たされ、やすらぎを得たり、物事に対する新たな関心や感性を養ったり、人々との交流を図ったりすることができる。

3.3 人間としての大切さ

PMI依存、特に過度なネット依存は、物事の背景に生身の人間が存在すること、他の人々に自分と全く同じ命の重みと尊厳があることを見え難くする。人間が助け合い共存するには、自分につながる重たい家族や暮らし、職場や地域社会、人々の心と祈り、それらが自分と全く同じく、すべて

の人々、家族、地域社会、国、民族に、そして世界中に存在することに気づき、思いを馳せる必要がある。この気づきと思いは、未知の土地や人々を訪ね、OSIとして実体を知ることからはじまる。

3.4 社会としての大切さ

「地方の時代」といわれながら都市と地方、地方と地方の格差が拡大し、地方に元気がない。我が国発展の土台であった「助け合いの心、活力と未来志向の精神」が壊されかけて経済至上主義がはびこり、格差社会を生みだし、地方は疲弊し、国家・社会は次第に機能不全をきたしつつある。

国家・社会の尊厳を守り、活力の維持・増進と暮らしの発展を希求すべき日本にとって、これから何を道標として歩むべきか。経済至上主義を拒んできた地方や中山間地にこそ、再出発すべき日本の原点となる暮らしの基本理念や伝統思想、文化、生活の深みが温存されているのではないか。

その意味でも、都市と地方、地方と地方の人々が相互に訪ねて実際にOSIとして知り、理解することが重要となる。そこに互いの思いやりと交流が生まれ、知恵と情報を出し合い、協働することによって日本の新たな理念や価値が創造される。

3.5 人類としての大切さ

現代科学と経済至上主義に支えられた20世紀の物質文明と人口爆発は地球規模の環境汚染、資源・エネルギー枯渇と高騰を招き、ついには、人類は地球の有限性と物質文明の行き詰まりを意識せざるを得なくなった。このような地球と人間、自然と文明の関わりの大問題に直面して、人類は、そして一人ひとは、どうすればいいのだろうか。

しかし、このような重たい課題があっても、個々人や利害を共有する集団、国家レベルでは、自を律する行動にはなかなかつながり難い。それは何故だろうか。人類に共通するような大課題は、多くの人々がPMIによって十分に認識している。しかし、単なる知識にとどまり、自分とは無関係のこととして整理されているのである。

それを踏み出すには、まず、実物・実体を見て、ふれ、体験し、OSIを取得して学び、理解することが重要である。

4. オンサイトツーリズムとは

新しい観光活動のあり方として、多人数の団体旅行による画一的な物見遊山的観光とは異なり、

目的や意識を共有する少人数のグループあるいは個人が、自らのテーマを設けて現地を訪れ、地域の豊かな自然、歴史、文化、創造物や人々とのふれ合い、体験、交流等を通じて、知的好奇心を満たし、心身の充足を得ようとするミニツーリズムが広がりつつある。いわゆるマスツーリズムからミニツーリズムへの転換である。

“オンサイトツーリズム (On Site Tourism : OST)”とは「人々が明確な意図とテーマをもって現地 (On Site) を訪れ、実物にふれて感じ、学び、楽しみ、体験し、OSIとして気づくこと」を目的としたエコツーリズム、グリーンツーリズム、産業ツーリズム等、今日活発化しつつあるツーリズムの幅広いジャンルを包含した概念である。“オンサイトツーリズム”の呼称は現地・実物・本物回帰、OSIの取得という人間の基本的意識と行動に基づいていることはいままでのない。

5. “オンサイトパーク”とは

“オンサイトパーク (On Site Park : OSP)”とは、オンサイトツーリズムの受け皿として、ありのままの自然、人々の暮らし、文化、創造物、産業・社会システムなど「現地に存在する実物」について、来訪者の希望やレディネスに応じた学術的・専門的な質の高いOSI、及び設置者としての明確なメッセージを付加して幅広く市民を受け入れ、情報取得や体験の場を提供するものである。

OSPは、地域の人々、NPOなど各種団体、自治体、教育機関、企業、国の機関、及び学識経験者や技術者などが協働する集人・集客のための仕組みであり、及びその仕組みによって来訪者に提供される特定の地点や区域あるいは施設である。

6. オンサイトツーリズムの事例は

6.1 エコツーリズム

エコツーリズム (Ecotourism) は、地域固有の自然や歴史、文化など地域資源の保全・保護を図りながら観光資源としての魅力を活用し、観光開発や地域振興を図ろうというものである。環境省²⁾や (NPO) 日本エコツーリズム協会³⁾など行政機関や関係団体、民間において施策展開と実践が図られている。2007年6月に「エコツーリズム推進法」が成立している。以下概要を紹介する²⁾ 3)。

エコツーリズムでは、地域の豊かな固有性に基

づく様々なプログラムが策定され、旅行者と地域を取り持つガイドや情報ツールによるインタープリテーションが準備される。プログラムでは自然の成り立ちや歴史・文化が持つ深い意味をわかりやすく解説し、来訪者は大きな感動を得ることがでる。エコツーリズムの持続的な発展を図るために、①観光によって地域資源が損なわれることがないように、適切な管理に基づく保護・保全をはかること、②利用のためのルールづくり、ガイド等の人材育成、情報の提供等の取り組みが求められる。そのためには、旅行者、地域住民、観光業者、研究者、行政に関わる人々の智慧と努力がバランス良く発揮されることが不可欠となる。

6.2 グリーンツーリズム

グリーンツーリズム (Green Tourism) は平成6年制定「農山漁村余暇法」をベースとして農水省⁴⁾や (財) 都市農山漁村交流活性化機構⁵⁾など行政機関や関係団体、民間において施策展開と実践が図られている。Web⁴⁾ 5)を参考に紹介する。

グリーンツーリズムとは、都市住民が人間性豊かな農山漁村に親しみ、人々との交流を楽しむ“地域とのふれあい”を切り口とした滞在型余暇活動である。都市住民と農山漁村との交流によって、①来訪者の感動や安らぎ、知的好奇心など心身の充足、②食の生産過程及び品質・安全についての相互理解、③来訪者の飲食 (名産料理や郷土料理)・地域産品購入・各種体験・宿泊・交通移動などに対する経済支出、④受け入れ側による都市住民の食文化的指向性の把握と経済収入、⑤来訪者による地域のにぎわいと元気力の回復効果等を目指している。

6.3 産業ツーリズム

産業ツーリズム (Industry Tourism) は、経産省近畿経済産業局⁶⁾によって提唱され、推進が図られている「産業」を切り口とした新たな視点の観光活動である。その概要を紹介する⁶⁾。

産業ツーリズムは物づくりを対象とした観光である。産業施設や生産現場、産業製品等を観光資源として捉え、それらを学び、体験することで物づくりの心にふれ、人的交流をうながす観光活動を指している。あらゆる生産物、その生産過程、仕組み、携わる人々の心と技、そして工場とか農場とか漁場とか生産の場が産業ツーリズムの素材や題材となる。よって産業ツーリズムは、工場、

企業、伝統産業、企業博物館、そして試験所・研究所等、多種多様な現場や施設が対象となる。

産業ツーリズムは、これまで観光の対象でなかった工場や農林水産業等の産業施設、研究所等に注目するものであり、新たな観光ビジネスへの発展が期待される。

また、産業ツーリズムに当たる動きとして、大規模土木構造物、科学実験・研究施設、発電所、工場、地下空洞など様々な社会インフラを対象とした市民の「社会科見学」が始まっている⁷⁾⁸⁾。

7. 土木分野の動向は

7.1 土木と市民・地域との様々な接点

従来から長大橋梁やダムなど大型構造物は強力な観光スポットとして人々を魅了してきた。

近年、土木施設や構造物の持つ基幹機能に観光や地域活性化をキーワードとした価値を付加して、市民・地域との接点強化を図る取り組みが活発化している。例えば、道路では「道の駅」が挙げられる。道の駅は「休憩機能」、「情報発信機能」、「地域の連携機能」の3つの機能を併せ持ち、国民に広く定着している。また、日本風景街道は、日本列島の魅力と美しさを再発見し、地域資源を活かして日本の優れた原風景を創成する運動を促し、地域活性化、観光振興への寄与を図っている。

ダムでは、「地域に開かれたダムづくり」、「水源地域ビジョン」等が挙げられる。ダムの豊かなオープンスペースを活かし、地元等と連携して地域づくりや環境保全等を図ることを目的としている。また、ダムの持つ水と緑の空間の魅力から、エコツーリズムやグリーンツーリズムの対象として位置づけられている例もある。さらに、「琵琶湖疎水」など歴史的土木構造物は産業ツーリズムの対象とされている。

これらの例は、集人・集客インフラ、市民・地域との接点機能として大きな役割を果たしてきている。しかし、必ずしも土木ツーリズムを意識したものではない。主題となるべき「土木」の主張が不明確だからである。もちろん、土木と市民・地域との接点は様々であって然るべきである。「土木」がサブでも構わないのである。

7.2 土木ツーリズムの動向

関東地方整備局と土木学会関東支部は、「東京外郭環状道路」、「首都圏外郭放水路」について、

学生等に土木を身近に学習させることを目的として現地見学会を開催して好評を得ている。

また、土木学会は、全国の土木遺産を収録し、その中から重要な土木構造物を選び『日本の近代土木遺産』としてまとめている。特にすぐれたもの、由来やエピソードが豊富な構造物を「選奨土木遺産」として認定・表彰している。さらに、会誌特集号「土木と観光」を先月刊行している⁹⁾。

国交省では地域と連携して歴史、風土等に根ざした美しい国土づくりをめざしている。例えば、“砂防フィールドミュージアム”の整備は、優れた景観を有する砂防地域を観光資源の核と位置づけ、自然や史跡、歴史的砂防設備等を材料とした面的な環境整備を行い、子供たちや市民の新たな学習の場、交流の場の形成を図る取り組みである。

これらの動向は土木技術や施設の教育的・社会的価値を認めて積極的に見よう／見せようというものであり、OST／OSPの理念に一致する。

8. むすび

むすびに当たり、土木分野のオンサイトツーリズムのニーズと動向を踏まえ、かつ、土木のメッセージを市民・地域へ明確に伝える新たな仕掛けを意図し、「シビルテクノツーリズム」とその受け皿としての「シビルテクノパーク」を提案する。具体的には編を改めて紹介する。

参考文献

- 1) 平野 勇：ダムや土木、公共事業を少し離れて見つめてみませんか、第2部「ダム分野、土木分野における“On Site Tourism”と“On Site Park”の提案」、第18回ダム工学会研究発表会特別講演資料、2007
- 2) 環境省自然環境局：
<http://www.env.go.jp/nature/ecotourism/index.html>
- 3) (NPO)日本エコツーリズム協会：
<http://www.ecotourism.gr.jp/ecotour.html>
- 4) 農農林水産省農村振興局：
<http://www.maff.go.jp/nouson/chiiki/gt/1aboutgt.html>
- 5) (財)都市農山漁村交流活性化機構：
<http://www.furusato.or.jp/>
- 6) 近畿経済産業局通商部：
http://www.kansai.meti.go.jp/3-1toukou/industrial_tourism/houkoku18fy.html
- 7) 例えば小島健一編：社会科見学に行こう、143p、(株)アスペクト、2008
- 8) 例えば小島健一、栗原亨、小林哲朗、津村匠：ニッポン地下観光ガイド、(株)アスペクト、2008
- 9) 土木学会編：特集「土木と観光」、土木学会誌、vol.93、no.5、pp17-32、2008